

君にこの声は届かない。
遮られたまま、触れられないまま。

*

誰もが、「水晶」と呼んでいた。
水晶。——水晶に映るモノ。謂わば、彼女は、監視対象というモノだった。

彼女の朝は早い。朝日が顔を出すほんの少し前に、目を開ける。
寝起きはよく、ベッドの上で半身だけを起こし、そうしてただじっと、空が明るくなりきるのを眺めている。光を瞳にきらきらと。
そうして、部屋の中が明るくなった頃。ゆっくりと顔を此方に向け、瞬きもせず、いち、に、さん、秒数えて。
身体ごと向き直り正座、此方に深く頭を下げる。
しばらく後、彼女は身体を起こし、ちらとだけ此方に視線を流して。
その後は、もう此方を気にせず日常に入るのだった。

*

*

雨降る窓辺に寄り添い、長いこと眺め続けていた。

その内うたた寝に移っていたが、その表情は穏やかで、おそらく雨が好きなのだろうと思った。

*

本を読んでいた。ベッドに寝転がり、ひたすらに。

食事もうあまりに取らないものだから、思わず端末を短く鳴らした。

色が変わっている窓の外に、苦笑していた。よくあることだったのかもしれない。

*

編み物をしていた。慣れているのだろう、魔法みたいに、ふわふわもこもことあつと言う間に形が出来ていく。少し大きめのミトンの手袋、紺色で落ち着いた見た目の。

作ってしまった後は、机の引き出しに仕舞っていた。

(その後、使おうとする様子もなかった。)

*

*

*

*

穏やかな日々が、ただただ過ぎていく。 春のような。

そう、勘違いをしていた。自分だけが。

*

しあわせな勘違いを、していた。

*

*

半年も経たなかった。

そうして、彼女の最期のことを知る。低い空は、灰色。
音も無く初雪が降りる。

*

*

彼女の朝は早い。朝日が顔を出すほんの少し前に、目を開ける。
(きっと、よく眠れていなかったのだ。分からぬ明日の運命に恐れて、)

寝起きはよく、ベッドの上で半身だけを起こし、そうしてただじっと、空が明るくなりきるのを眺めている。光を瞳にきらきらと。
(万華鏡のように波打って美しかったのは、そう、涙を湛えていたのだ、今更気付くなど、)

そうして、部屋の中が明るくなった頃。
ゆっくりと顔を此方に向け、瞬きもせず、いち、に、さん、秒数えて。
(瞬いたら零れるからだ、揺れる光が。)
身体ごと向き直り正座、此方に深く頭を下げる。
(分かっていたのだ。彼女は、——自分がこうなることを、始めから。)

しばらく後、彼女は身体を起こし、ちらとだけ此方に視線を流して。

その後は、もう此方を気にせず日常に入るのだった。

(でも。今日は、)

端末はもう鳴らせない。必要ない通信機にはロックがかけられている。

****。エラー。

****。エラー。

****。エラー。

ふいに、此方の音が聞こえているはずもない彼女が此方を見上げた。

じっと見て、部屋の中にゆっくり視線を移して、またじっと見て。

「」

聞こえない。彼女の声も。

「どうして」

届かない。この声も。

*

*

彼女の為に降った雪は、地に積もることなく、彼女と共に気化していく。

本当の春も、もう、来ない。

*

(1,237 字)